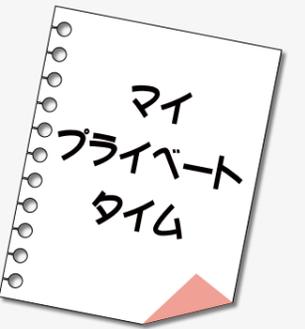


# 北緯45度、過酷な海峡、そして国境のまち

稚内市長(北海道) 横田耕一  
Kouichi Yokota



## はじめに

私のまち、北海道稚内市は日本の最北端です。国境のまちです。43km、宗谷海峡の彼方にはロシアサハリン州が鎮座しています。冷戦時代は、緊張あふれる地域だったのです。「大韓航空機撃墜事件」なども発生いたしました。

200年前、間宮林蔵が間宮海峡を発見する前後にも、ロシアの南下で、幕府の緊張が高まった時期もありました。北海道が、ロシアの南下に遭遇して、幕府の直轄領とされるなど、国境の不確定と相まって、関心の高まった時期であります。宗谷の地にも、防備を命じられた東北諸藩の藩兵が派遣され、厳しい冬の寒さのため多くの人々が命を落としたころでもありました。

一方で、「利尻礼文サロベツ国立公園」を抱え、手つかずの自然に恵まれた地でもあります。かつて、「最北端を踏破しよう」「利尻礼文へ行こう」などとたくさんの方が来てくれました。残念ながら、そんなお客さまも減少しています。そこで、今一度、このまちの歴史を掘り起こし、地域学を育てようと活動を始めました。稚内の魅力は最北端というだけじゃない。歴史や文化など興味を抱いていただくことがいっぱいあるということ、多くの人に発信するためです。

km、ほとんどが浜辺ですが、西海岸では波間に浮かぶ利尻山(1721m)を眺めながらの雄大なウォークになります。全国からの参加をお待ちいたしております。

## 「歩くこと」が歴史とまちの再発見

ちなみに、私のウォークは、ノルディックウォークです。きちんとした講習を受けたわけではありませんが、北欧のフィランドで始まったらしく、スキーのストックを持って歩きます。ストックを前後に振りますから、全身運動になります。私なりに考えますと、なんとなく、歩く



林蔵企画展の様子



43km 彼方のサハリン島

## 改めて「誇りある歴史」の発掘

市を挙げて、「稚内学」に取り組もうというものです。1600年代からの関心が向いています。幕府の動きやこの地方に足跡を記した人々の動静が気になり、ささやかですが、かかわりのある書物を読むようにしています。林蔵をはじめ、最上徳内、松田伝十郎、伊能忠敬、松浦武四郎、多くの探検家たちが足を運んでいます。かわりがあるといえば、田沼意次ですが、彼は「賄賂政治」で悪名を轟かせた男ですが、蝦夷地開拓においては、極めて先見性の



利尻山を背に林蔵も歩いた西海岸

姿勢が良くなるような気もしています。週に2回、1時間程度歩くこと効果的といわれていますが、残念ながら、そこまですなかなかに実現できません。

北海道の人は、本当に歩けません。広がりが故のことなのでしょうが、最先端を行く車社会です。歩くことはとても大切です。健康にはもちろんですが、車と違って、周りの景色がまったく異なり、新しい発見もあります。かつて、子供と一緒に市街地を自転車で1周したことがあります。およそ20km程度ですが、車窓の景色とまるで違うことに親子ともども驚いたものでした。

教育委員会でも四季を通じて「市民歩く会」を開催しています。ナイターウォークもあります。冬はスノーシューや歩くスキーも活用しています。最近、参加

高かった人でした。また、川路聖謨の子孫が本市に在住しています。というわけで、「観光マイスター制度」を制定し、市民の皆さんにも、自分の住むまちの歴史を語るようになろうと呼び掛けています。それを究めることは、もてなしの心「を育てることにも通じると信じているからです。

最近、お腹が気になってきたこともありますが、自然豊かな地を歩こうと愛犬とともに、野山をウォーキングしています。一年を通してです。冬は、スノーシュー(西洋かんじき)を履いて歩きます。吹雪や暴風などの日は(本市は名だたる風のまちで、74基の風車があるくらいです)危険ですので、そう回数は稼げません。また、あまり山深いところまでは、「熊」が怖くて行けません。しかし、当地はちよつと「街」を離れるといっぱいの自然があるのです。市や観光協会などはそこに着目し、「フットパス」コースを設定しました。最北端宗谷岬背後背地の広大な牧場の中にもコースがあります。

それが高じたわけではありませんが、昨年、間宮海峡発見200年祭に続き、「林蔵ウォーク」を企画しようとしています。全国各地では、伊能忠敬の足跡を辿るべく、「伊能ウォーク」が行われていると聞きます。伊能全図の北海道部分の多くは、林蔵が実測したものです。稚内市の境界から境界まで歩くとすればおよそ90

者も増えてきました。自分の住むまちの、折々に変化する様子を楽しむこともできます。

「まちづくり」にも、歩くという視点は活性化を促す上でも大切なことだと思います。ご多聞にもれず、本市の中心市街地はシャッターを閉める店ができてきており、疲弊しかけています。起死回生の第一歩は、歩いてもらえる地域にすることだろうと考え、動線や立ち寄り場所の配置に意を配ろうと考えています。いわゆる「まち歩き」です。郊外や森の中など里山や自然の真ただ中を歩くこととともに、商店街などまちの中をシヨッピングなどを楽しみつつ散策すること。市民も観光客の皆さんにも、歩いていただくことが活性化の一助になると確信しています。歩いてみたいと感じる魅力をどう作り出すか、それがにぎわいを取り戻す大きな手立てになるだろうということです。歩くことは何にもまして良いこと、新たな発見を期待してわがまちを歩き回ります。



横田耕一市長